

# 二木立著『医療改革－危機から希望へ』

(勁草書房, 2007年11月5日発行, ¥2700+税)

## 目次

### 第1章 世界の中の日本医療とよりよい制度への改革

#### 第1章 世界の中の日本医療

##### 第2節 よりよい医療制度をめざして

##### 第3節 敢えて「希望を語る」

##### 補論1 効率的診療と医療費抑制とは別次元

##### 補論2 医療経済学から見たリハビリテーション医療の効率

##### 補論3 医療・社会保障についての国民意識の矛盾

##### 補論4 私はなぜ医療者の自己改革を強調するか？

##### 補論5 厚生労働省が医療費・医師数抑制政策の軌道修正を考え始めた？

### 第2章 後期小泉政権の医療改革

#### 第1節 混合診療解禁論争とその帰結

##### 1 小泉首相の混合診療解禁の指示と今後の見通し

##### 2 混合診療問題の政治決着の評価と医療機関への影響

##### 3 混合診療問題の政治決着の勝者と敗者

##### 4 混合診療全面解禁論の凋落

#### 第2節 2004・2006年の診療報酬改定の特徴

##### 1 2004年診療報酬改定の特徴と2006年改定の展望

##### 2 2006年診療報酬改定の意味するもの

##### 3 リハビリテーションの算定日数制限の問題点と解決策

#### 第3節 2005年郵政選挙前後の医療改革案

##### 1 複眼で読む「骨太の方針2005」と「平成17年版経済財政白書」

##### 2 小泉自民党圧勝後の医療費抑制政策

##### 3 厚生労働省「医療制度構造改革試案」を読む

#### 第4節 2006年医療制度改革関連法と療養病床の再編・削減

##### 1 医療制度改革関連法による医療制度改革の見通し

##### 2 療養病床の再編・削減

### 第3章 安倍政権の医療政策

#### 第1節 安倍政権の医療政策の方向を読む

#### 第2節 安倍政権の半年間の医療政策の複眼的評価

#### 第3節 「基本方針2007」と「規制改革推進3か年計画」を読む

#### 第4節 厚労省「医療政策の経緯、現状及び今後の課題について」を読む

### 第4章 医療改革と医療ソーシャルワーカー、認知症ケアビジネス

#### 第1節 医療制度改革と増大する医療ソーシャルワーカーの役割

#### 第2節 認知症ケアのビジネスモデルを考える

## 第5章 医療満足度と医療費の常識のウソ

### 第1節 医療満足度の国際比較調査の落とし穴

### 第2節 医療費についての常識のウソとトンデモ数字

- 1 日本の医療費水準は2004年に主要先進国中最下位となった
- 2 日本の医療費水準は主要先進国中最下位なことが確定
- 3 2003年度概算医療費の3つの「真実」
- 4 正反対の医療給付範囲縮小論と麦谷医療課長のトンデモ発言
- 5 「がん難民」の解消で5200億円の医療費削減??
- 6 終末期医療費についてのトンデモ数字

## はしがき

本書の目的は、医療経済・政策学の視点から、以下の3つを行うことです。第1は小泉・安倍政権の7年間の医療改革の特徴と帰結を包括的かつ複眼的に検討すること、第2は日本の医療満足度と医療費についてのさまざまな常識のウソを根拠に基づいて批判すること、第3は私自身のよりよい医療制度をめざした改革案とそれへの「希望の芽」を示すことです。全体は5章からなります。

第1章は本書全体の序章かつ総括です。第1節では、世界の中の日本医療の特徴を明らかにするために、前半で小泉・安倍政権の医療改革の概括的評価を行い、後半では世界の中の日本医療の質の評価を客観的評価と主観的評価に分けて検討します。小泉政権の5年半、新自由主義的医療改革の是非をめぐって政権内外で激しい論争が続けられましたが、最終的にその本格実施は挫折しました。他面、伝統的な医療費抑制政策はさらに強化され、日本は主要先進国（G7）中医療費水準は最低だが、患者負担割合は最高という大変歪んだ医療保障制度を持つ国になってしまいました。安倍政権は、大枠では小泉政権の政策を引き継いでいるものの、その部分的見直しも行っています。

第1章第2節では、日本医療の質を向上させるためには公的医療費の総枠拡大（主財源は社会保険料の引き上げ）が不可欠であるが、国民の医療不信を考慮すると、そのためには医療者の自己改革と制度の部分改革が必要なことを指摘します。第3節では、特に2007年に入って生じている医療改革の希望の芽を、具体的に指摘します。それらは、①最近の医療制度改革の肯定面と専門職団体の自己規律の強化、②マスコミの医療問題の報道姿勢の変化、③安倍政権による小泉政権時代の過度な医療・福祉費抑制政策の部分的見直しの3つです。

第2章では後期小泉政権の医療改革（2004～2006年）を包括的に検討します。第1節では2004年後半に行われた混合診療解禁論争とその帰結を、第2節では2004・2006年の診療報酬改革の特徴を、第3節では2005年9月の郵政選挙で小泉自民党が圧勝する前後の医療改革案の特徴を、第4節では2006年に成立した医療制度改革関連法とそれの一環である療養病床再編・削減方針の特徴と今後の見通しを、検討します。

第3章では、安倍政権の1年間の医療政策を複眼的に検討します。第1節は安倍政権発足直後に行った医療政策の方向の予測で、第2節はそれの検証です。第3節では安倍政権が閣議決定した「経済財政改革のための基本方針2007」と「規制改革推進のための3か年計画」を、第4節では厚生労働省「医療政策の経緯、現状及び今後の課題について」を、複眼的に検討します。

第4章では、医療制度改革関連法と2005年介護保険法改正が医療ソーシャルワーカー（MSW）と認知症ケアビジネスに与える影響を検討し、有能なMSW養成のための社会福祉教育の新しい課題と認知症ケアのビジネスモデルを考える上での留意点について問題提起します。後者では、「コムスン処分」の意味も示します。

第5章は、一般市民だけでなく、研究者や医療関係者にも蔓延している日本の医療満足度と医療費についての常識のウソを多面的に検討します。第1節は医療満足度の国際比較調査を行った12論文の包括的な文献学的研究であり、第2節では医療費についての各種

の常識のウソとトンデモ数字を批判します。

小泉政権が史上最大の診療報酬引き下げを強行し、医療制度改革関連法を成立させた2006年から、救急医療や小児科・産科医療を中心として医療危機・医療崩壊が大きな社会問題になっており、医師・医療関係者の閉塞感や絶望感がますます強まっています。しかし、第1章第3節で詳述したように、2007年からは従来にはなかった医療改革の希望の芽も生まれており、この好機を生かせば今世紀に入って初めて、よりよい医療制度をめざした改革が実現する可能性が出てきました。これが本書のメッセージであり、副題を「危機から希望へ」としました。

7月参議院選挙での安倍自民党の惨敗と9月の安倍政権崩壊・福田政権の誕生により、希望の芽がさらに大きくなった、と私は判断しています。

2007年9月

二木 立

## あとがき

本書には、『医療改革と病院』（勁草書房,2004）出版以降の約3年半に発表した主要論文を収録しました。第1章の本体は1講演録と1論文を統合した上で大幅に加筆しましたが、第1章の補論と第2～5章に収録した30論文は、「歴史の証言」として、そのまま収録し、【補注】で元論文の記述の誤りの訂正と最小限の加筆を行いました。ただし、『医療経済・政策学の視点と研究方法』（勁草書房,2006）と『介護保険制度の総合的研究』（勁草書房,2007）に収録済みの論文は除きました。

大変幸いなことに、3年前に『文化連情報』（発行・日本文化農業協同組合連合会）に、「二木教授の医療時評」という連載枠を作っていただき、ほぼ毎月、論文を掲載しました（2004年10月号～2007年10月号に合計48論文）。本書に収録した全32論文（第1章本体の元論文と講演録を含む）のうち23論文が「医療時評」に最初に掲載したものです。毎月「医療時評」を書き続けるのは決して楽ではありませんでしたが、結果的には、時々発表・決定される医療改革（案）や医療費のトンデモ数字等を継続的に検討することができました。その結果、本書は、この間の医療改革の包括的な「生きた」研究、あるいは政府・厚生労働省による公式の解説や通史には欠落している重要な事実や視点を多数含んだ「もう1つの医療政策史」になったと自負しています。ただし、2006年以降大きな社会問題になっている医師不足の医療経済・政策学的分析は行えませんでした。本書出版後すぐに取り組みたいと思います。

本書第1章第2節では、『21世紀初頭の医療と介護』（勁草書房,2001）と『医療改革と病院』に続いて私自身の医療改革案を提案するとともに、第1章第3節で、それが単なる夢物語ではなく、2007年に入って医療改革の「希望の芽」が生じていることを具体的に示しました。この部分は2007年4月7日に開かれた日本医学会総会シンポジウム「世界の医療と日本の医療」の「基調講演」で、「医師が自信と希望を持って医療を実現できるようになる」（司会の堤修三大阪大学教授の言葉）ことを目的にして初めて述べたことをまとめました。これが、過酷な医療費抑制政策の下で閉塞感・絶望感にとらわれている医師・医療関係者を激励し、よりよい医療制度をめざした改革に立ち上がる一助になることを願っています。

実は、私は2007年7月に「還暦」を迎え、本書は60代最初の著書になります。ただし、還暦になって変わったことは映画がシニア料金（1000円！）で観られるようになったことくらいです。幸い健康状態はおおむね良好ですので、今後も前向きに研究に精進したいと思っています。

なお、私は2005年1月から、毎月1日に、メールマガジン「二木立の医療経済・政策学関連ニューズレター」を配信しています。これは、①最新の拙論、②医療経済・政策学関連の最新の洋書や英語論文の紹介・抄訳、③私の好きな名言・警句の紹介の3本柱で、①には紙数の制約のため本書には収録できなかった拙論もすべて掲載しています。このバックナンバーは、いのちとくらし非営利・協同研究所のホームページ（<http://www.inhcc.org/jp/research/news/niki/>）上に転載されていますので、お読み下さい。これの配信は少なくとも、日本福祉大学の定年（65歳）まであと5年間は継続しようと思っています。

最後に、今回も原稿が遅れたにもかかわらず超特急で出版作業をしていただいた勁草書房編集部の橋本品子さん、および「医療時評」欄をご提供いただいた『文化連情報』編集長高杉進さんに感謝します。

2007年9月

二木 立